

湘南医療大学 ティーチングポートフォリオ

大学名 湘南医療大学
所 属 保健医療学部 看護学科
名 前 倉橋 悠子
作成日 2026 年 5 月 25 日

1. 教育の責任

私は湘南医療大学 保健医療学部 看護学科において、成人看護学領域を中心とした教育を担当している。2026 年度は、1 年生から 4 年生までを対象に、「看護基礎ゼミ」「成人看護方法論Ⅱ」「ヘルスアセスメント学Ⅲ」「ナースングプロセスⅡ」「チーム医療論Ⅱ」などの講義・演習を担当している。さらに、「看護基盤実習Ⅰ・Ⅱ」「急性期看護実習」「統合実習」といった臨地実習も担当し、看護の基礎知識と実践力を統合的に育成することを目標としている。学生一人ひとりの学修ニーズに応じた丁寧な指導と、具体的なフィードバックを重視している。

また、国家試験対策委員会や実習委員会に所属し、教育の質向上や大学運営にも積極的に関わっている。加えて、1 年チューターとして履修支援や学生生活支援を行い、学生が安心して学び続けられる環境づくりにも努めている。

知識と実践力を備えた看護師の育成を使命とし、学生の長期的な成長を支える教育および学修環境の整備に取り組んでいる。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

私は、看護において患者を全体的に捉える視点が何より重要であると考えている。看護師は、患者の身体的な症状だけでなく、心理・社会的背景や生活環境を含めた全体像を理解することで、真に質の高いケアを提供できる。患者が自らの力で前進し、回復へ向かうことを支援することが、看護師の本質的な役割である。

この理念は、私の教育活動にも深く反映されている。私は、学生が患者を全人的に理解し、包括的なケアを提供できる力を身につけることを目指している。また、学生自身が自らの行動や思考のパターンを認識し、それを自己成長へつなげていく力も重要であると考えている。

教育の場では、知識や技術の習得に加え、患者との信頼関係を築くためのコミュニケーション能力、倫理的判断力、そして患者の意思を尊重する姿勢を重視している。私は、学生一人ひとりの個性や学びのペースに配慮しながら、内省を促す対話を通じて、その成長を丁寧に支援している。

私は、学生が全体性の視点を持った看護師として患者に寄り添い、相手の力を信じて一歩を踏み出すケアを提供できる人材へと成長してくれることを、心から願っている。

2) 理念をもつに至った背景

私が「全体性の視点で相手を捉え、患者や学生の力を信じて支援する」という理念を持つに至った背景には、造血幹細胞移植看護に携わった臨床経験がある。この領域では、患者は無菌室という制限された環境で、孤独や不安、死への恐れへと向き合いながら治療を受ける。そうした状況の中で、苦しみは身体的なものにとどまらず、精神的・社会的背景とも複雑に絡み合っていることを実感した。目に見える表層のみ

で判断するのではなく、その人がどのような人生を歩んできたかという背景や意味に目を向ける視点の重要性を、私は臨床の現場で繰り返し学んできた。

この経験を通じて、「人はすでに力を持っている存在であり、その力を認識できるよう寄り添うことが看護の本質である」という考えに至った。専門的な知識や技術は看護師にとって不可欠だが、それだけでは患者の本質的な支えにはなり得ない。むしろ、患者自身が自らの状況をどう意味づけ、どう進んでいくのか、そのプロセスに寄り添う姿勢が、深い支援を可能にするのだと感じている。

この姿勢は、教育の場にも通じている。学生もまた、各々に思考や行動の傾向を持ち、それを認識しながら成長していく存在である。私は、知識を一方的に与えるのではなく、学生が自らの力に気づき、主体的に学びを深められるよう支援することを大切にしている。

困難に直面する学生に対しても、それを単なる弱さや未熟さとせず、その経験の意味に目を向け、寄り添う関わりを心がけている。こうした臨床と教育の両面での経験を通じて、私は「人を全体として捉え、その内なる力を信じて支援する」という理念を確立し、教育実践の中核に据えている。

3. 教育の方法・戦略

私は、本学の理念および看護学科のポリシーに基づき、相手の尊厳を尊重する姿勢を大切にしながら、臨床現場で実践的に判断・対応できる看護師の育成を目指して教育を行っている。教育においては、単に知識や技術を習得させることにとどまらず、患者の背景や状況の意味を理解し、自ら思考し、他者と協働して行動できる柔軟性と主体性の育成を重視している。そのため、講義、グループワーク、演習、記述課題、個別対応など多様な手法を組み合わせ、学生の理解度や反応に応じて柔軟に授業を設計・運営している。

1) 教育の方針

- ・看護の専門知識と臨床判断力を統合し、現場で活用できる力を育成すること
- ・学生一人ひとりの特性や理解度に応じた対応と、内省を促す関わりを行うこと
- ・他者との対話や協働を通じて、多様な視点を獲得できる学修環境を提供すること
- ・教員自身が教育力を継続的に見直し、学修環境の質を向上させること

2) 教育方針を具体化する方法

教授方法

・講義に加えてグループワークなどのアクティブラーニングを取り入れることで、学生が自ら考え、他者と共有・整理する機会を設けている。たとえば、授業内では「輸液療法中の患者が日常生活で困りそうなことと、それに対する看護援助」といったテーマを扱い、複数の視点から意見交換を行うことで、実践に必要な判断力や多角的な思考を育んでいる。

- ・臨床に即した事例を取り上げ、「もし自分がその看護師ならどう行動するか」といった問いかけを行うことで、判断力や想像力を養っている。
- ・リアクションペーパーでは、感想だけではなく、講義を受けて理解した内容を記述してもらい、思考の深まりや価値観の変化に着目して指導を行っている。

授業の工夫

- ・学生の表情や反応、提出物を細かく観察し、その場で問いかけを行うなど、柔軟に授業構成を変えている。反応が乏しい場合には、具体的な事例やグループワークを挿入し、関心の喚起を図っている。
- ・問いかけにおいては、「なぜそう思ったのか」といった内省的なものに加え、「別の立場で考えるとどうか」といった視点の転換を促す工夫をしている。
- ・視覚的な理解を促進するため、図表やイラストを用いたスライドやプリント教材を作成している。

授業以外の活動

- ・学修につまずいている学生には、学修方法について個別に指導を行い、実行可能な学修戦略の獲得を支援している。
- ・学修意欲が高い学生には、発展的課題や補足文献を紹介し、より高度な学びへとつなげられるよう、意欲を尊重した対応を行っている。

自己研鑽

- ・教育学や看護教育に関するFD活動、大学院での学びを通じて、教育手法や評価手法について継続的に学んでいる。
- ・リアクションペーパーをもとに、学生の学びにとって有効な支援は何かを分析し、授業改善に反映している。
- ・臨床との接点を持ち続けることで、現場の実情を踏まえた教育内容のアップデートを図っている。教員自身が現場感覚を持つことで、学生にとっても学びのリアリティが高まると考えている。

4. 学修成果

学生からの授業評価

2025年度のリアクションペーパーでは、演習やグループワークに対する肯定的な意見が多く寄せられた。

「ヘルスアセスメント学Ⅲ」の高齢者体験では、「視野の狭さや関節の動かしにくさを実感し、高齢者の生理的変化を考慮した具体的なアセスメントの重要性が理解できた」といったコメントが多くみられた。

また、「ナースングプロセスⅡ」では、「他グループの発表や意見交換を通じて、誰が見ても同じケアができるよう、5W1Hを用いた具体的な看護計画の書き方を学ぶことができた」という意見が多数あった。

学生の成長

学生は、体験や他者との意見共有を通して、知識を単に暗記するだけではなく、実践的な看護へ結びつける力を養っていることが確認できた。特に、患者の困難さへの共感や、具体性のある看護計画を立案する力の向上がみられた。

教育活動を通じた発見と課題

リアクションペーパーを通して、学生同士のグループワークが、自身の視点の偏りや不足に気づく上で非常に有効であることを再確認できた。

一方で、スライドの文字色(赤色など)が見えにくく、スマートフォンで拡大して閲覧している学生がいることや、個別性を踏まえた計画立案に難渋している学生がいることなど、次年度に向けた新たな指導上の課題も明らかとなった。

5. 改善のための努力

スライド等の視覚効果の改善

文字数の削減や図表の活用に加え、学生からの「赤文字が見えにくい」との指摘を踏まえ、教室後方からでも見やすい色や、適切なフォントサイズを意識した資料作成に努める。

双方向性の強化

授業の双方向性を高めるため、リアルタイムでの声かけや対話を意識し、学生の理解度をその場で把握しながら、柔軟に授業内容を調整するよう努めてきた。

実際に、学生のリアクションペーパーからは、「みんなからのフィードバックをもとに修正し、より良い授業にしているのがすごいと思った」といった肯定的な反応が得られた。

このように、学生の反応を即座に授業へ反映させる取り組みは、授業への参加意識や学修意欲の向上につながっていることが確認できた。今後も、学生からの生の声や反応を積極的に汲み取りながら、学生と共に授業を創り上げていく双方向的なコミュニケーションをさらに強化していきたい。

6. 今後の目標

短期目標

2027 年度までに、リアクションペーパーから明らかとなった課題を踏まえ、授業資料の視認性向上(スライドの配色や文字サイズの最適化)を進める。

また、グループワークの効果をさらに高めるため、学生同士が互いに学び合いながら、患者の「個別性」をより深く看護計画へ反映できるようなファシリテーション技術や指導方法を身につけていきたい。

長期目標

教員相互授業参観などの FD 活動を通して、単なる臨床知識の伝達にとどまらず、概念的・体系的理解に基づく教育実践をさらに深めていきたい。

【添付資料】

シラバス

・担当科目:「看護基礎ゼミ」「成人看護方法論Ⅱ」「ヘルスアセスメント学Ⅲ」「ナーシングプロセスⅡ」「チーム医療論Ⅱ」「看護基盤実習Ⅰ・Ⅱ」「急性期看護実習」「統合実習」

開発教材(講義資料・演習資料・レポート課題)

・「看護基礎ゼミ」「成人看護方法論Ⅱ」「ヘルスアセスメント学Ⅲ」「ナーシングプロセスⅡ」「急性期看護実習」「統合実習」において作成した講義レジュメ、演習計画、レポート課題、評価基準などの教材一式

授業評価・フィードバック

・「看護基礎ゼミ」「成人看護方法論Ⅱ」「ヘルスアセスメント学Ⅲ」「ナーシングプロセスⅡ」「チーム医療論Ⅱ」「看護基盤実習Ⅰ・Ⅱ」「急性期看護実習」「統合実習」における、リアクションペーパーおよび授業改善アンケート結果

テスト原本

・「成人看護方法論Ⅱ」において作成予定の定期試験問題および評価基準

以上